

Title	李昊宰著 『韓国外交政策의理想과現實 (一九四五-一九五三)』 : 李承晩外交와美国
Sub Title	Lee Ho-je, "The ideal and reality of Korean foreign policy (1945-1953) : the foreign policy of Syngman Rhee and the United States"
Author	小此木, 政夫(Okonogi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.6 (1975. 6) ,p.132- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750615-0132">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750615-0132</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 紹介と批評

李昊宰著

## 『韓国外交政策の』

## 理想と現実 (一九四五—一九五三)』

— 李承晩外交と美国 —

(一)

一九四五年八月一五日の日本植民地主義の力による抑圧からの解放は、南北朝鮮に、あらゆる了解事項の存在しない政治の生の姿を出現させた。植民地統治は終焉したが独立はまだ来ないという、一種の真空状態下にあつて、民族主義右派から共產主義者にいたるまで、国内のあらゆる政治指導者は、自らの理想にもとづく独立政府の樹立に奔走した。二人の解放者(米、ソ)、解放者と被解放者、被解放者相互間に存在した唯一の了解事項は、日本の統治が終つたということだけであつた。

解放朝鮮の政治過程は、このように、国際的にも国内的にも、朝鮮政治の本質をむき出しにしたものであつたといえる。またそれゆ

えに、この時期の朝鮮政治の研究は、それぞれ接近方法こそ異なれ、Gregory Henderson, Korea: The Politics of the Vortex (Harvard Univ. Press, 1968); Soon Sung Cho, Korea in World Politics 1940-1950 (Univ. of California Press, 1967) など、問題の根幹に触れる、秀れた成果を生み出している。これらの英文の著作に加え、ここで紹介する李昊宰教授の労作は、この問題の解明に努力した、現地国知識人の手になる第一級の成果であるといえよう。

(二)

本書の最大の特徴は、それが小国としての朝鮮外交のあるべき姿を摸索する外交政策論の形をとつている点に求められよう。これは、著者の問題意識が「韓国(朝鮮—評者)的政治体制或はその秩序とは、外的政治力を行使する諸外勢間の関係と内的政治力を行使する内的諸行為間の関係が決定されることによつて形成される」(一九ページ)とする冷徹な事実認識と、排他的かつ独占的な支配ないし競争国との勢力均衡をもつばらとする周囲の大国の影響力を中化する問題が、「弱小国一般のもつとも基本的で本質的な政治・外交問題である」(二〇ページ)とする現実的な思考から出発している以上、当然のことであるかもしれない。

このような著者の問題意識はまた、「外勢的政治力の極小化」と「国内的政治力の極大化」を共通の基本課題とする小国一般の外交政策論定立の可能性への著者の着目によつても特徴づけられている。著者はここで、大国の役割と影響力をその中心的な分析課題と

する国際的ないし地域の体制決定論に對置するものとして、「小国を中心とする小國際政治体制」概念を提唱し、朝鮮半島に歴史的に出現した政治体制の類型化を試みている。(一)強大な中国を外勢的行動者とし、中国に從う親中国的政權を内勢的行動とする中国一帝國支配体制(一九世紀前半まで)、(二)中国の独占的朝鮮支配が崩壊し、中、日、露三大国の一時的かつ不完全な力の均衡状態にあつた不完全競合力均衡体制(一九世紀後半—一九一〇年の日韓併合まで)、(三)日韓併合によつて日本の独占的支配が確立した日本一帝國支配体制(日韓併合から日本の敗戦まで)、(四)米ソ兩大国が半島の南・北半部で、それぞれ圧倒的な力を行使する兩極化体制(一九四五年以降)などがそれぞれある。もちろん著者が、第五の類型として外勢の影響力が極小化され、内勢的政治力が極大化される完全競合力均衡体制を想定していることはいうまでもない。

著者による、朝鮮半島を中心とする小國際政治体制の類型化は、小国の側からの理想の内外政策摸索の結果ではあるが、同時に、一九四五年の朝鮮解放の位置づけに新しい方向性を与えるものでもある、すなわち、著者によれば、一九四五年の朝鮮解放は、まずもつて日本一帝國支配の壊滅からくる既成の政治体制の崩壊以上のなものでもなかつた。それは、いいかえれば、外勢は外勢どうし他の外勢との新しい関係を摸索しながら自己の權益の守護に役立つ内勢を探し、内勢は内勢どうし指導権闘争を行いつつそれぞれ自己を支援してくれる外勢を探すという、新政治秩序形成のための試行錯誤の開始にほかならず、一定の条件が満たれないかぎり解放と獨立の等式

は成立しないばかりか、単に支配形態の交替に終ることもありうるという性格のものにすぎなかつたといえる。著者が、八月一五日の解放の特殊性を強調する以前に、それを中国一帝國支配の終焉した李朝末期の経験と比べて、朝鮮政治のうえに再びくり返すことのある一般的経験であるとする理由はここに存在する。

### (三)

著者は第一篇につづいて、本書の第二篇において、朝鮮獨立問題の中心課題となつた解放直後の政連合運動、信託統治案と米ソ協商、南北協商の三点に注目し、内外政治との連関のうえで、これを検討している。これら三つの問題が、それぞれ国内の政治勢力を二分、三分して、「内勢の集中」を不可能化し、朝鮮の国家的統一と獨立の維持を困難にした「内的条件」として論じられていることは、いうまでもない。

第三章「政連合運動の失敗と政權闘争の激化」は、解放直後の人民共和國派(民族主義左派の指導者呂運亨は共產党と連合し、九月六日、「朝鮮人民共和國」の樹立を宣言した)と重慶臨時政府派(李承晩、金九、金奎植らの民族主義指導者たちは、重慶政府の正統性を主張した)との合作交渉失敗の過程を扱っている。著者はここで、共產主義者と民族主義者の合作交渉を振り返つて、それがすでに一九四五年末には挫折に終つていたことを明らかにしている。著者の分析によれば、合作交渉にみられる李承晩と韓民主党の態度は、終始共產党とソ連の政策にたいする不信任によつて特徴づけられていた。またかれらの

親米一辺倒政策は、共產主義者と民族主義右派とが、共に他方を米ソの傀儡として排撃し合うという、「内勢の集中」とはほど遠い状況を生みだした点において、大きな責任を負わなければならないものであった。これに比べ、他に遅れて帰国した金九、金奎植らの臨時政府要人は、共産党との合作において、より中道的かつ妥協的な態度を示したが、やはり政党連合に成功することはできなかった。著者はここでは、共産党の偏狭かつ非妥協的な態度と朝鮮の現実にたいするこれらの「幻想」を強く批判している。

「韓国信託統治案と米ソ協商の決裂」と題する第四章では、米国の朝鮮信託統治案、信託統治案をめぐる朝鮮内の政治論争と政争、米ソ合同委員会とその流産の過程、李承晩の主張と米ソ冷戦の激化などが論じられている。著者はここで、朝鮮の信託統治案が米ソ間の利害調整に基づく「国際的現実」として現われ、それが朝鮮人の民族主義的な要求に基づく「国内的現実」と激しく衝突したことを強調し、それについては国内諸勢力間の権力闘争の道具に転落していく過程を詳細に分析している。これはまた、一面では、信託統治案をめぐる民族主義者（信託統治反対）と共產主義者（信託統治賛成）との内勢相互間の対立が「国際的現実」をより複雑化していく過程でもあったといえよう。

民族感情をそのままぶつけ、米国に、ソ連との合意の産物である信託統治案の放棄を迫まるという激烈な反託運動は、結局、米軍政を朝鮮内の政治勢力から孤立させ、ソ連との交渉においてきわめて困難な立場に陥れるというディレンマをもたらした。また民族主義

右派の反ソ的言動は、かれらにたいするソ連の一層の不信感を呼び起し、結局、朝鮮半島により一層の国際的緊張をもたらすこととなった。こうして信託統治案をめぐる論争は、当面する国際的現実にかんがって対処するかという政策論争としての側面をもちつつも、李朝末期の開化派と旧守派との論争と同じく、問題の解決を外勢の力に委ね、一層の両極体制化に資する以外のいかなる効果をももたえなかつたといえよう。

つづいて著者は、本章の後半において、米ソ合同委員会の流産の過程を論じている。ここでは、米ソの交渉の経緯と同時に、米軍政府による南朝鮮内の中道派連合擁立の試みが分析され、賛託か反託かの論争が、一九四七年に入つて徐々に信託統治賛成（中道派）か南朝鮮単独政府（李承晩）かの論争に性格を変えていく過程が詳細に追跡されている。結局、一九四七年七月に米ソ合同委員会が事実上の決裂をみるや、米軍政府の中道派擁立政策も挫折せざるをえず、南朝鮮内の政治状況は、急速に李承晩を中心とする反共・反託・単政（単独政府）の路線に傾斜していくところとなつた。しかしこれが、南北朝鮮の分断固定化への道に外ならなかつたことは、いうまでもない。

朝鮮独立問題の最後の論点は、南朝鮮単独政府構想と南北協商構想の対立という形で出現した。本書の第五章は、「南北協商の失敗と大韓民国の成立」と題して、李承晩の単独政府構想（南半部のみの選挙実施）と金九、金奎植らの南北協商構想（南北朝鮮の指導者会議、米ソ両軍の即時撤退）が対立し、米国の強力な李承晩支持のもとで、つ

いに南朝鮮の単独選挙が実施され、大韓民国が成立をみるまでの過程を追っている。著者は、米軍政府の李承晩支援を東西冷戦の朝鮮への波及(すなわち、対ソ封じ込め)という観点からとらえており、「協商を通じて南北朝鮮を統一しようとする金九氏と金奎植氏の努力は、誠実であり、英雄的なものであつたが、好むと好まざるとにかかわらず、朝鮮人たちは米国が用意したものとソ連が用意したもののうち、いずれか一方を支持しなければならぬことを立証したにすぎなかつた」(二七七ページ)と結論づけている。

政党連合に失敗し、信託統治問題をめぐつて激しく対立した朝鮮内の諸政治勢力は、かくして両極化する世界のなかで、自らの行動の自由とその自立性の基盤を喪失していつた。著者が序説において指摘した、国内政治力の集中化のためのいくつかの原則が、この教訓を要約している。それらは、(一)小国の対外政策は一強大国に偏らない中立的なものでなければならぬ、(二)小国の外交は非理念的でなければならぬ、(三)小国は外勢を競合させるために、どの強大国にたいしても敵対行為や政策を追求してはならない、とするものである。

#### (四)

以上簡単に内容を紹介してきたが、最後に本書にたいする評者の感想を付け加えたいと思う。それは、著者の「小国を中心とする小国際政治体制」概念とは反対の側から出発する、冷戦の「朝鮮的特徴」といふべきものにかんするものである。すなわち、著者の指摘

するように、すでに解放直後の時期において左右の国内対立が妥協の余地のないものとなり、信託統治をめぐる対立によつてそれがさらに拡大・激化したものであるとすれば、朝鮮における冷戦の性格は、「国際政治の朝鮮への介入という文脈と同時に、「国内的現実」による「国際的現実」の複雑化ないし深刻化という側面を十分考慮に入れて解釈されなければならないことになるからである。たしかに、解放朝鮮の歴史には、一面において、「冷戦の先取り」現象ともいふべきものがみられる。李承晩の反ソ的言動は、常に冷戦自体の進展や米国の対ソ政策より一步進んだところにあつたし、朴憲永らの共產主義者の対米認識ないし対右派認識にも同様のものがみられた。これらのことは、朝鮮における冷戦が、国際政治の現実とは別のレベルの、特殊朝鮮的要素によつて加速ないし促進された可能性を示唆するものである。このような「冷戦の朝鮮的特徴」の究明、すなわち国際的要素と、朝鮮的要素との分離作業は、例えば著者の指摘する李朝末期の政治状況など、朝鮮政治史へのより深い理解によつてはじめて可能となるように思われる。

評者の第二の感想は、著者の指摘する、一九四五年の朝鮮解放の一般性にかんするものである。日本の植民地主義の崩壊がもたらした政治的真空状態は、確かに、朝鮮政治が一九四五年になつて初めて経験したものではなかつた。しかしながら、一般性という点では、解放に際して朝鮮政治がみせた政治的凝集力の欠如(Ⅱ内勢集中化の失敗)も、けつして特殊な経験ではない。評者はむしろ、すべての国際環境を内政化せずにはいない、その国内政治のダイナミズムの一

般、性に新鮮な驚きを感じたことを告白せずにはいられない。そしてこの驚きは、本書の著者の抑制された事実認識への尊敬の念に繋がるものであることを付け加えておきたい。

なお、本書は紹介した内容の外に、李承晩の対米外交、米国の対韓政策、米韓相互防衛条約にかんする三つの章をもっている。

(ソウル、法文社、一九六九)

小此木政夫